

集団心理学の概念

「お金は、その社会の集団的無意識の反映である」。これがこの本で最初の定理だ。お金についての無意識的側面を探索するのは、決して生半可にできることではない。優れた心理学者でさえ、この問題に対して独自の見解を出せないでいる。

【第一章 欠乏の恐怖】

われわれが表層意識で認識しない

事柄は、すべて

運命として片付けられる。

カール・グスタフ・ユング

一人が見る夢はただの夢よ。

でもみんなで見るとは

現実になるのよ。

オノ・ヨーコ

“この世で最も危険な動物”

動物園の鏡の下にある表示

精神分析学の創始者フロイトは、お金を排泄物と同一視した。

しかし、「フロイト派の柱である精神分析の診察料金がフロイトの言うような排泄物かどうかは、検便してみないとわからない。」

米心理学会が会員を対象に、カウンセリングや診察に関する最大のタブーは何かを探る調査をした。答えは「患者のプライバシーを口外すること」でも「患者と寝ること」でもなく、なんと「お金を貸すこと」だった。

「マネーの世界は、太古の無意識という大海原のごとく、深くて広い。自分や患者が無意識にどんな空想をしているか知りたいのなら、当人がお金にどんな欲をかいているかを見ればよい。そのイメージに接したとたん地獄を見るはめになる。ただし地獄の入り口でカロン（三途の河の渡し守）にお金を払わないと中に入れない。精神分析はノイロゼを治すが、お金の悩みだけは治せない。なぜなら、お金が揺りかこの代わりをして、人々の魂にあらぬ夢を見させているからである。お金の欲得が複雑に絡み合った世界を探ると、きっとそこに現代の魂の群れが見つかるに違いない。それは沈黙の海底をあわただしく這いまわるカニたちである」（ジエームス・ヒルマン）。

お金に関する喜怒哀楽のメカニズムについて改めて考えてみるならば、ユングの言う無意識の領域で「運命」として片付けられている問題から人間を解放できるかもしれない。どのようにして、そしてなぜ人間はお金の操り人形になり、したくもないことをやらかしてしまうのかをはっきりさせる必要がある。

この章では、お金のそうした側面を語るのに必要な術語について述べる。元型心理学の概念は、集団的心理の探索に最適なツールである。そこで、元型アータイプと影シャドウという二つの主要概念について述べる。元型と影は、お金に関わる人間の情緒と行動の理由をうまく説明してくれるので、これを思考ツールとして人間の金銭行動図を描いてみたい。

元型

ユング学派が言う「元型」の定義はさておき、私の言う「元型」の定義はごくシンプルである。元型とは「人間の情緒と行動の典型的なパターン」である。それは、時代を超え、どの文化にも繰り返し現れる。私はユングの心理学体系（古典的ユング学派の定義については、囲み参照）を思考ツールとして用いようとしているが、必ずしもユング心理学のすべてを認める必要はないということをおぼろげに断つておく。しかし、元型心理学の術語を使うと人間の態度や外界に対する行動パターンの説明がしやすいということも事実なので、そのようにして話を進めたい。

私は歴史家のアーノルド・トインビー流に考えてみた。つまり、人間心理の元型は、人類進化のための文化戦略の一環として位置付けられるべきだということだ。

元型は無数にある。たとえば神話に出てくる人物や動物はすべて、ある元型を基にしている。不朽の名作と言われる物語は、いずれも元型をモチーフとしている。たとえばジョゼフ・キャンベルは、「一〇〇〇の顔を持つ英雄」を本質的で普遍的な物語だと言った。英雄は、ギルガメッシュ（古代オリエントの叙事詩に登場する英雄）やヘラクレス（ギリシャ神話に登場する怪力の英雄）の神話、ある

「(元型は) 姿形のあるものというよりも、むしろ比喩である。元型を定義することは可能だが、それはある比喩を別の比喩で表現し直しているに過ぎない。だが、元型の定義で絶対に忘れてはならないことがひとつだけある。つまり元型とは、人の心をとりこにして華麗な幻を見させてくれる存在なのだ」(ジエームス・ヒルマン)。

ユングも、壮大な宇宙観を基に、比喩を巧みに駆使して元型の姿を解説している。

「元型は川床のようなものである。水が流れ去れば川床は干上がってしまうが、別の水がまた流れてきて川床を潤す。おのおの元型は、命の水が何世紀も注いで掘った一本一本の川に似ている。同じ一本の川に長いこと流れている水もあるが、その水は遅かれ早かれ故郷の海へと帰っていく」。

「元型は、運命の顔をして私たちの人生に介入する。逆に、元型とは人類の経験の複合体であると言えなくもない。神話の世界ならともかく、この現代では、アニメ(男の無意識に存在する女性像の元型)が女神となつて目の前に現れることはない。しかしアニメは生身の女として現れることもあり、これが悲劇喜劇を生む。たとえば、世間の尊敬を集めている七〇歳代の大学教授が、年老いた妻を捨てて若い赤毛の女優と駆け落ちしたりすれば、世間は『また神様がいたずらをした』と言つだらう」。

「元型と魂の関係は、本能と肉体の関係に等しい」。

いは中世に描かれたギヤラート、ガウエインなどの「輝くよるいの騎士たち」、そして江戸時代の剛胆な武士サムライ、そして二〇世紀には「スーパーマン」として、あるいはアマソンの部族に伝わる英雄として描き出されている。「こうした英雄伝説は、細部はそれぞれ大きく異なるが、調べれば調べると構造的に似通っていることがわかってくる。つまり、アフリカの部族や北米インディアン、ギリシ

ヤ人、ペルーのインカなど、それぞれ互いに文化的な接触のないグループや個人が作り出した物語ではあっても、そこには普遍的なパターンがあるのだ。

英雄たちの生まれはおしなべて卑しい身分だが、出生のいきさつは神秘性に満ちている。幼いころから超人的な力を持っていて、瞬く間に指導者が権力者に上り詰める。悪の力と戦って勝利を得るが、自尊心という名の罪により過ちが避けられない（たとえばギリシャ悲劇に出てくる神々への不遜）。そして裏切りや英雄の自己犠牲により死んでいく¹³。

ほかにも普遍的な元型が存在する。たとえば旧約聖書に出てくるソロモン王とシヴァの女王は賢者の元型である。ロミオとジュリエットの恋物語やマリリン・モンローの人生は、悲劇の恋人の元型である。

私たちは、誰もが夢の中で元型の世界を繰り返し訪れている。一方、広告業者や政治キャンペーンの企画屋、ハリウッドの映画業界は、元型を巧みに利用して公衆に特定の情緒を抱かせたり行動を起こさ



ソロモン王とシヴァの女王。いずれも「君主」の元型の代表的人間像である。カンタベリー大聖堂のステンドグラス。13世紀の作。（挿画：Moreno Tomasetig）

せたりしている。大衆のイマジネーションをとらえたメディアの作り話には、当然ながらどれも元型がふんだんに盛り込んである。宗教的な背景とは関係なく、世界中で一〇億人以上の人々がダイアナ妃の葬儀を見たという事実は、悲劇のプリンセス物語の元型的本質をよく示している。国民全員がとりこになるような話は、その文化の集団的無意識を代表するものである。たとえばアメリカ人がO・J・シンプソン裁判に夢中になったのは、アメリカの歴史に人種差別の傷跡が残っているからで、大統領のセックス・スキャンダルにメディアが躍起になったのは、ピューリタン文化における性の抑圧という影を浮き彫りにしている。

ユングはこう言っている。「歴史上のすべての偉大なアイデアは元型に帰納する。それは特に宗教に言えることだが、科学や哲学、そして倫理学の中心概念にも当てはまる。こうした中心概念は、あの考えを意識的に現実に投影した結果生まれたもので、元型の亜種と言えよう。意識という人間の機能は、目や耳などの五感を通じて外の世界を受け身に認識するだけでなく、目に見えない内界を目に見える現実に置き換えるエネルギーも併せ持つ」。

この本では、お金がまさに「われわれの内界を、目に見える現実に具体化する」手段であることを述べる。つまりお金とは、無意識的な元型の力を物質世界に投影し強化する手段なのだ。

影

元型とは別に、お金に関する集団的無意識を知るには「影」という概念についても知る必要がある。この概念は、もともとユングが彼の自叙伝の中で述べている夢（囲み参照）に由来するが、私の定義

では、影は文化的抑圧下における元型の現れである。⁵¹

元型と影は、「人間にあらかじめ予測可能な特定の行動を起こさせる」という共通点がある。元型と影の関係を理解するには、実例を挙げるのが一番いいだろう。

たとえば、上位自我を表す元型は「君主」である。男性にとつては王、女性なら女王がそうだ。何かの理由で上位自我を抑圧している人間は、暴君になったり逆に臆病者になったりする。それが君主という元型の二つの影だ。暴君は、健全な君主の心身面を過剰に表しており、臆病者は君主の性質が不足している。元型の二つの影は、恐怖を仲立ちにして表裏一体の関係にある。実際、暴君は弱く見られるのを恐れており、臆病者は暴君に見えるのを恐れているのだ。

そのうえ、暴君も一皮むけば臆病さが顔を出す。反対に弱い者が権力を手になると暴君になる場合が多い。

図3は、恐怖がいつまでも君主の内に籠っている、元型のエネルギーが分散してしまうことを表している。抑圧された元型は、個人でも集団でも、このような形の影で現れることになる。君主以外の元型でも、恐怖によって影はこ

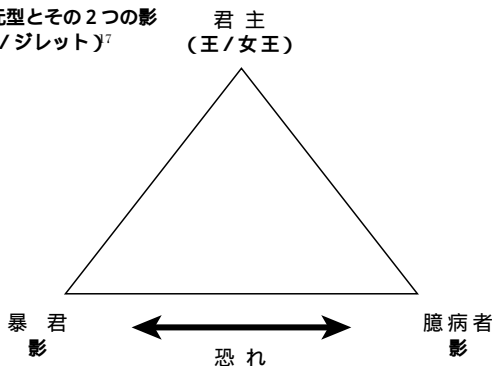
ユングの「影なる夢」*

「ある夜、わたしは見知らぬ土地を歩いてい
た。強い風で一向に前に進めず苦しかった。
あたりには濃い霧が立ちこめていた。わたし
は弱々しい灯りを両手で覆っていた。火は今
にも消え入りそうだったが、頼りはこの灯り
だけだった。突然、何か背後から忍び寄る
気配を感じた。振り返ると、それは巨大な黒
い影だった……。目が覚めたとき、それが
何なのかすぐわかった。その黒いものは、灯
りが霧に映し出した自分の影だったのだ。ほ
のかなこの灯りはわたしの意識であって、自
分にとって唯一の光であることもわかってい
た」

のように二極化する。たとえば「戦士」の影には、サディストとマゾヒストの二つのパターンがある。また「恋人」の元型が抑圧されると、愛の奴隷になるかインポテンツ（不能）になるかどちらかだ。どんな場合でも、二つの影はコインの表と裏であり、一方は元型の本質的エネルギーが過剰で、もう一方は不足している。そしてすべての影に共通するのが、対極への恐れである。たとえばセックスに溺れる人は、不能になることへの恐怖に駆られているのである。

現代の理性的人間は、古来からのシンボルと元型の持つパワーを捨て去りがちである。これはユングの指摘である。「理性的に言えばくだらないとか脈絡がない」という理由でそれらのパワーを捨て去るのは、愚の骨頂だ。われわれの精神構造では、シンボルと元型は人間社会を構築するうえで欠かせないエネルギーであり、捨て去れば大きな損失が避けられない。シンボルと元型が抑圧されたり無視されているところでは、その特殊なエネルギーは無意識の中に封じ込められ、思いもよらない結果をもたらす。こうして失われた心的エネルギーは、われわれの意識の奥深くに破壊的な「影」を焼き付けて消えることがない。

図3 君主の元型とその2つの影
(ムーア/ジレット)⁷



世のためになる良い性格でも、抑圧されれば魔性と化すこともある。良心的な人々が無意識の世界を恐れ、さらには心理学まで恐れるのは、こうした理由による³¹⁾。

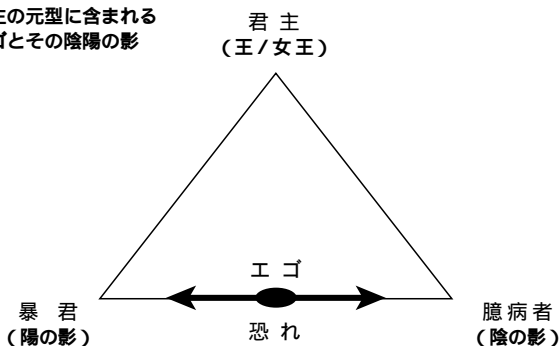
ありとあらゆる経済学は、人間を超理性的なエコノミック・マシンの見なしで理論を組み立てている。そのせいで、お金が私たちの集団的情緒をプログラミングして操っていることを、きれいさっぱり忘れ去ってしまった。お金の売買市場（金融市場）がなぜ周期的なパブルとその崩壊から逃れられないのか？ この謎に対する解答は、「理性への全面的依存」である。これは第四章で説明する。

陰陽とユング心理学

こうした両極的な「影」の存在について、私は「陰陽」という古典的な道教の概念に結び付けて考えた。陰陽の発想法によれば、「影」の両極性は「協力 競争」「平等主義 階級主義」「直感的 論理的」「女性的 男性的」などの両極的な性質に相当する。

元型のモデル図においても二分化すると理解しやすいためだ（第三章）。つまり、歴史上存在したお金の制度を分類したり（第六

図4 君主の元型に含まれる
エゴとその陰陽の影



章、第七章)、新しいお金の制度を分類して理解するのに使えるのだ(第八章)。

この時点では、道教の「陰陽」と、ユングの「影」の概念をひっくり返って考えてみたい。

道教的に言えば、暴君は「(元型の)陽が過剰になった不均衡な状態」であり、一方、臆病者は「陰が過剰になった不均衡な状態」を表す。心理学者が同様の過程に対して「元型のエネルギーがエゴを膨らませる」と言う場合は前者を指し、「エゴが弱まる」と言うときには後者を指す。

意識とは個人一人ひとりの舞台だと思えばいい。この舞台では、個人の意識(エゴ)と個人の無意識、そして集団的元型がそれぞれの役割を演じる。エゴは、他の役者たちを意識していないので、たいていは「自分の意思」で「自分だけ」が演じている独り舞台だと思込む。しかし、その人が影を恐れている限り、エゴは二つの影の間にある恐怖にとらわれ、結果的にそのどちらかを演じることになる。つまり、元型を的確にとらえることを学習していないエゴは、その元型の影にとらわれてしまう。

図5 君主の元型の統合

